

十字路で立ち話抄二〇十二年九月～二〇十三年十二月

# 付箋

吉田惠吉

目次

破れ網戸	1
首ったけ	2
島の宗教	3
抜け筏	4
天気雨	5
速贅	6
仕舞った	7
街を編む	8
愉しい兜虫	9
近道	10
枯葉そよぎ	11

吹き溜り	12
雲間から	13
秋の拳	14
隠れ蓑	15
猟師	16
落葉前線	17
人質	18
稽古	19
溶ける魚	20
括弧	21
破れ傘	22
雪明かり	23
共倒れ	24

雪模様	25
搗き直し	26
ささら	27
空っ穴	28
滑空	29
トライアングル	30
気と機	31
吉日	32
道具	33
炉端	34
疾風	35
胡座立ち	36

寒気払い	37
シーソー	38
三面鏡	39
電話口	40
開花	41
隠れ囃	42
花見	43
霧吹き	44
光と闇	45
稽古法	46
逃げ虫	47
佇立	48
反転	49

幕間から……………	50
緑怪談……………	51
付箋……………	52
小養い……………	53
拮抗……………	54
雪片譜……………	55
気休め……………	56
葉隠れ……………	57
初舞台……………	58
海辺の観覧……………	59
河童本……………	60
捨て鉢……………	61

キセキ	62
延長戦	63
帰宅	64
ヒーロー	65
束になつて	66
夏草	67
雲の轍	68
夏の額縁	69
水たまり	70
人さらい	71
紙切れ	72
屋上にて	73
盛夏遡行	74

遠雷縦走	75
生い立ち眩み	76
知恵の輪	77
眼鏡拭き	78
折り返し	79
空っぽ	80
反転	81
月に篝火	82
鼻歌	83
使途不明	84
蜻蛉	85
蜘蛛を逃がす	86



好奇の泡	87
遊動	88
はだか虫	89
紅葉列車	90
指思案	91
岐路	92
逆光	93
破れ障子	94
余興	95
冬構え	96
薬草	97
料金不足	98
搬送辞退	99

二色紅葉……………100

手遅れ……………101

居留器……………102

不自然……………103

粒立ち……………104

伝聞……………105

年越し……………106

破れ網戸

夏から秋への  
変わり目など  
見失ったかな。

季節を詠えず  
暮らしを壊す  
力が過ぎるか。

饒舌と寡黙の  
露出が際立ち  
読解が彷徨う。

試行が思考の  
ペダルを踏む  
流域サイクル。

唄えなくとも  
弾けなくとも  
音楽は愉しい。

釣り止めても  
捕えたら放し  
どこまで深く。

(12.09.21)

## 首ったけ

傾いた陽射しに  
窓際のソーラー  
サイクルが黙り。

秋分の日を界に  
寒暖バランスが  
逆転したみたい。

卯月妙子が描く  
「人間仮免中」の  
読後に過換気が。

異常と正常など  
境界領域を分つ  
首ったけボビー。

イエスの方舟の  
消息を知らない  
千石イエスの姿。

接して漏らさず  
夢の中の恋人と  
ひもとく養生訓。

(12.09.25)

## 島の宗教

秋の陽射しを滑る  
番のトンボの羽が  
光り輝く空の高さ。

近づく台風予報の  
予測進路を裏返す  
逆さま日本近海図。

尖閣諸島や竹島の  
領土問題は中国や  
韓国との主権争い？

スイートスポットは  
ラケット打面に無く  
ゲームコート空間に。

静観している米国は  
国家という衣で包む  
宗教戦争と見なすか。

身体が捌ける空間に  
くまなく準備された  
有効打撃面を使って。

(12.09.28)

## 抜け筏

庭木の葉陰から  
蝶が羽ばたいた  
起源に川の流れ。

雲間に渡された  
稜線の割れ目で  
跨ぐ源流あたり。

橋桁が見下ろす  
架橋されたいま  
ここの流れだけ。

左岸を河口まで  
自転車を走らせ  
右岸を上る帰路。

沢歩きに川沿い  
ドライブ疾走に  
峡谷鉄道の眺め。

拾い集めつなぎ  
合わせただけが  
流れのすべてか。

(12.10.02)

## 天気雨

秋雲の影が撫でる  
バス停で見かけた  
老女にスルーされ。

和図書の整理など  
仕事の手ほどこきや  
土曜の午後の映画。

駅前映画館で「豚と  
軍艦」を奢られて  
もう半世紀以上に。

人違いでも他人の  
そら似でもいいが  
思いがけぬ出会い。

挨拶など交わせず  
バスを降りられた  
後姿に確信が揺れ。

二カ月ぶりに入る  
講義棟は女が匂い  
秋の陽射しに雨も。

(12.10.05)

速贄

鉢植えに水やり  
東西の窓を開け  
家に風を通せば。

屋根の結露消え  
百舌が狙い定め  
電線から急降下。

書捨て通信文に  
人違いのような  
自分の忘れ姿が。

曲がり消えたか  
見えなくなつた  
消息が一人芝居。

不義理が植わり  
放棄を肥やしに  
齟齬の蔓が絡む。

追いかけて曲がる  
角から飛び立つ  
鳥の声も聞えず。

(12.10.09)



仕舞った

ドスンと響いた  
まだ明けやらぬ  
縁側のあたりで。

残暑を抜け出た  
伝書鳩のような  
訃報がぶつかる。

古い猫が病んだ  
後を追いかけて  
初秋の棲家まで。

木犀が匂い始め  
老妻はひたすら  
句を書き残して。

去り難きを肩の  
冷えのごとくに  
娘二人に読ませ。

詩人の後を追  
天井の星を祭る  
秋燕となつたか。

(12.10.12)

街を編む

遠出した宿に  
ラジオは無く  
TVとLANが。

横糸で編んだ  
大阪を素通り  
縦糸の街歩き。

元気なころの  
お袋が旅した  
京都に別れを。

渡る神通川に  
散弾銃でも余る  
鳶の群れが舞う。

隊列を組んだ  
椋鳥の止り木  
みたいな街並。

向い風に乗る  
アキアカネの  
余力の向うへ。

(12.10.19)

愉しい兜虫

再生音と椅子の  
居心地の悪さに  
躊躇した2回目。

再生装置も良く  
ゲストの演奏が  
音楽談義の目玉。

ギター1本での  
ビートルズ魂が  
CD3枚に溢れ。

昨夜来の雨風が  
静まりかえって  
忘れたなにかを。

耳が届きにくい  
暮らしの隅々で  
聞漏らした音を。

Sgt. Tsugei's  
Only One Club  
Band が魅ふや。  
(12.10.23)

近道

一夜の雨上がり  
初冠雪の山並を  
下る紅葉の吐息。

午後の日差しが  
鶏頭を吹き撫で  
裏道に影を運ぶ。

バス停を間引き  
誰か聞漏らした  
秋の管制官の声。

老女教師は疲れ  
駐車場の学生は  
行先を決めかね。

シャツフルした  
朝晩の冷込みに  
着込む冬の産声。

陽が陰るまでに  
今日の駐車場の  
待合室で一人旅。

(12.10.26)

枯葉そよぎ

右半分が禿げる  
夢見で目覚めて  
気づく冷込みに。

鳴声からそれと  
聞き分けられる  
小鳥の所在なき。

真面目な装いを  
消極的な選択で  
裏張りするのは。

読みとどまらせ  
想いを釘付ける  
ピラ一枚の行方。

授業に出るより  
いい事があれば  
病欠などないさ。

虫食いだらけの  
葉っぱの隙間に  
羽搏く鳥の声が。

(12.10.30)

吹き溜り

陽が射す窓側に  
吸い寄せられる  
秋の女体の深み。

刈り込みすぎた  
街路樹の末路に  
哀れな掃き溜め。

衣服を脱ぎ捨て  
街中の水族館で  
泳いでみないか。

不揃いの水槽に  
規格品の魚しか  
泳げないなんて。

目を閉じたまま  
ばたつく手足で  
触れる彼方まで。

響きを嗅ぎ分け  
傍だてる何かを  
聞分けるように。

(12.11.02)

雲間から

這い上がって  
網戸の真中で  
動かない蝸牛。

荒れ模様でも  
へばりついて  
生死も分らぬ。

午後の晴間に  
冠雪の山裾の  
紅葉が途切れ。

県内河川流域を  
Googleマップで  
なぞる空模様。

自転車走行で  
試してみたいに  
頁を歩き戻る。

村松昭が描く  
俯瞰絵本で見る  
「たまがわ」流域。

(12.11.06)

## 秋の拳

名残も跡形も  
残さないのが  
今どきの学祭。

二カ月の練習で  
四カ月に十五回の  
ラウンドを闘う。

一回こつきりで  
相手を入れ替る  
リングで向合う。

行き届きすぎた  
中等教育の影で  
見えない間合い。

セコンドもなく  
観客一人いない  
パフォーマンス。

ジャブも届かず  
フットワークで  
探すカウンター。

(12.11.09)



隠れ蓑

街中に下りて  
佇む紅葉から  
逃げ帰る冥想。

三日坊主でも  
間引きされた  
日常性の滞り。

昆虫や小鳥も  
寄り付かない  
庭で開く凶鑑。

本の病だなど  
どの手と目で  
聞き分けたか。

撮り溜めても  
手製の画像の  
あてどなさに。

今日の天気も  
昨日の体内の  
予報に崩され。

(12.11.13)

獵師

真つ白に輝く  
ハンティングを  
冠った像の夢。

連夜の雷鳴に  
追いつかれた  
時雨の中休み。

窓に映り込む  
新酒ワインの  
今年の味わい。

冬着の在処も  
仕舞い忘れて  
髭も剃り落し。

輪になっても  
背を向けても  
銃弾を打抜き。

留守電に入る  
受取り不明の  
鳴り響く傷跡。

(12.11.16)

落葉前線

木々の落葉が  
幹を露にする  
老いの立ち姿。

饒舌は横向き  
沈黙は縦向き  
彼方の茂みへ。

上り下りから  
未知の果てへ  
辿り終えたか。

聞慣れた耳に  
新しい音楽は  
届かぬままに。

年賀状よりも  
手帖と日記に  
書きなぐって。

黙した手形で  
白紙に挿んだ  
葉で開いた頁。

(12.11.20)

人質

朝方の障子に  
ヤモリの手足が  
くつきり透けて

教室に質問力が  
芽生えるまでは  
木瓜が狂い咲き。

写真がよすぎて  
とりとめのない  
映画の独りごと。

心のありようを  
推し量るような  
北陸の空模様。

冥想の手つきが  
雲間に割り込む  
凧糸を繰り出し。

貝殻のひと時が  
体内に羽搏けば  
しばし人質解放。

(12.11.23)

稽古

陽当たりは紅く  
日陰はより橙に  
時雨が染上げて。

日毎に違う輪の  
響きが共鳴する  
井戸水の温もり。

数百本も棄てた  
録画テープから  
取残された映画。

見忘れた枝葉が  
無心に腕を降り  
弧を描くように。

打ち放されては  
見つけた古巢に  
帰り着くように。

無駄骨ばかりが  
師を探し当てる  
手前で費やされ。

(12.11.27)

## 溶ける魚

魚の種類の数  
国内自死者数で  
泳がせてみたら。

身を切るような  
ターンの仕方で  
腕を振り抜ける。

受け身ばかりで  
息苦しくなると  
浮き身ができる。

向うと内からの  
出会いで生じた  
気が機となって。

体軸と切結んだ  
挨拶ができれば  
絶妙の出入りに。

老練海女が海で  
人知れず数えて  
繰り返す素潜り。

(12.11.30)

## 括弧

背戸の雪囲いの  
柱が短くなつて  
石や瓦をかませ。

体を括弧にして  
間いを括つたら  
はみ出す間いが。

田んぼを買つて  
砂利や土を入れ  
間をおいたのに。

庭土が痩せたか  
樹木が衰えたか  
流れ去つた盛土。

はめ込む桤板に  
はめ込みにくい  
反りやヒビなど。

屋根や外装など  
修繕で持たせた  
家屋に空き部屋。

(12.12.04)

## 破れ傘

曇まじりの風に  
糸が切れそうな  
凧みたいに飛ぶ。

頭上の鳥の影が  
後退するように  
遠ざかる街宣車。

天井板が落ちた  
トンネルの中で  
声が嘎れて消え。

夜の体育館での  
バド練習にまで  
選挙屋が訪れる。

投票どうします  
中休みの控室で  
問われて答えて。

襟を立てて急ぐ  
バス停の抜道に  
裏返る傘の補修。

(12.12.07)



## 雪明かり

師走の序の口に  
降り積もる雪で  
深まる仄暗さが。

出遅れた道路の  
融雪水のように  
雪吊りが届かぬ。

庭の除雪初日で  
痛めた腰も治り  
庭木の雪落とし。

錆び付いた体も  
鍛えるどころか  
よく弛めない。

わが家にしても  
住み慣れるほど  
修繕を積み重ね。

見知らぬ老いの  
内側から探れば  
違和感が頼りに。

(12.12.11)

共倒れ

初雪の風情など  
通り越す寒波の  
余波にくるまれ。

枝折れもなく  
晴れ上がって  
安堵する庭木。

枝々に積もった  
重さを雪吊りで  
円錐に分散させ。

五体を天空から  
吊るしたような  
体使いを夢見て。

冬場に音出しが  
不調のAV装置に  
必要な暖機運転。

体得できるまで  
教えながら学ぶ  
焼け石に水撒き。

(12.12.14)

## 雪模様

散歩から帰って聴く  
アナログレコードに  
まじる柔らかノイズ  
晴れ間を見計らつて  
例年の顔ぶれに加え  
一人加わった縄かけ  
挨拶が刷り込まれた  
来年のカレンダーを  
ドアノブにひっかけ  
やや血の通った家族  
でもないのに雪吊り  
庭木を濡らすみぞれ  
枝から空へと伸びる  
縄目の頂きあたりで  
一息ついている小鳥  
雪へと変わる軌跡が  
屋根に当って見事に  
消えるまでが見ごろ

(12.12.18)

搗き直し

持ち運んだ杵も  
蒸籠も処分して  
裏返された白が  
テール代わり  
寒さもひとときわ  
着古した正月の  
迷妄の抜き手で  
泳ぎだす夢見に  
遠のく想像の海  
福袋から飲干す  
ワインの響きに  
身体をあずけた  
細胞が聴き取る  
フォワードこそ  
噛む力とすれば  
バックスが舌だ  
なんて誰が言う  
及び腰の知識を  
拭取る直感力が  
桁外れな宛先へ  
搗きたての便り

(13.01.08)

さらさら

掃除ロボットなら  
人力が培う細かな  
身動きを奪うだけ

寒中水泳代わりに  
畳の上の水練でも  
やらないよりいい

自明の理の雪玉が  
現場に転がったら  
立ち位置で消えて

思い出せないまま  
忘れられた宿題に  
出し遅れた答えが

信号無視するしか  
渡れない途上では  
行きも帰りもなく

さらさらを鳴らして  
響きに割り込ませ  
整え動く関節掘き

(13.01.18)

## 空つ穴

降り込む一月の雨に  
年が明けたことなど  
忘れてしまいそうに

積もれば積もるほど  
軽くなる雪のような  
新年はいつ始まるか

苦節などあり得ない  
伸び悩んだ樹木から  
切り出された橋の袂

同調性がはりつめた  
氷原を渡りきれない  
亀裂の息吹が途切れ

十年も待てないのに  
行き過ぎた結末など  
操り人形の稽古不足

ドミノ倒しのように  
体感を全開に濃霧の  
新雪斜面に突っ込む

(13.01.22)

## 滑空

一月も終わり近く  
ゲレンデへと誘う  
日和の当たり外れ

登攀状況に合わせ  
履き替えた靴底と  
岩肌を探る素手で

酒が弱くなったり  
喫煙を忘れ果てた  
体力の心もとなさ

登りはじめてから  
頂ぎに近づきつつ  
過ぎれば折り返し

五体の扱い方から  
使い方に気づいた  
道具の往路と帰路

抜いた刀を納める  
鞘を感知して動く  
クライマールート

(13.01.29)

トライアングル

山肌を縦横に走る  
兎の足跡のような  
駆け込み初滑りへ

冠雪した田んぼと  
畑地を選び分けて  
群がる鴉の無関心

凍った桜並木から  
立ち上がってくる  
朝もやの向うへと

一目散に迂回路を  
タクシーで抜けた  
海拔メーターの針

料理の三角形から  
運動の有り様まで  
噛み砕いてみれば

競技用の練習から  
スキー実習用まで  
色分けられた斜面  
(13:02:01)



気と機

洗いたてのジーンズの  
ポケットからゴミ屑を  
つまみ出すような雪が

受験目前の子供らや  
卒業を控えた学生の  
足音が響かないよう

こつそりと積もった  
眩しさを際立たせる  
氏名のないレポート

どの学生が書いたか  
顔と名前がはつきり  
しなくても筆跡判定

力余ってラケットで  
床を叩きそうな子に  
力むなよと言ったら

力を抜いて打とうと  
する力をはたらかせ  
気をつかって失う機

(13:02:08)

吉日

二月の空と大地の  
おし問答みたいな  
消え物のやりとり

娘が生まれた日は  
さつぱり雪がなく  
バスで産院に向い

まさかにまとわれ  
きれぎれにつなぐ  
日常化の橋の半ば

見よう見まねでも  
ほんとうを目指す  
九十九里が道半ば

不惑を迎えた娘の  
テーブルに運んだ  
ヨメの手料理など

食べてくれるだけ  
いまここにあつて  
それだけにつきる

(13.02.12)

道具

雪が少なく雨が  
降る二月の気は  
どこか乱れがち

見よう見まねの  
全体の真似事に  
役立つみち山

冷えた指先から  
三脈に触れたら  
温もりに掴まり

里山を仲立ちに  
田舎の暮らしを  
働かせた道具類

色んな鎌や鋤や  
畑道具のほかに  
形の違う鉋や斧

なけなしの田や  
畑ともども母は  
売り払ってきた

(13.02.15)

炉端

厚着をして行く  
寒空の体育館で  
汗ばんで帰れば

寒夜の停電での  
囲炉裏で燃えた  
薪の炎が懐かし

凍結しはじめた  
歩道で滑ったら  
汗も引っ込んで

風呂場をガスで  
暖めシャワーの  
熱気が汗の名残

いまここにある  
何かと居合わせ  
つかの間安らぎ

八幡宮の裏山で  
ムササビらしい  
獣が木を伝った  
(13.02.19)

## 疾風

寒暖めまぐるしく  
吹き荒れる空から  
くるくるゴミ袋が

微小粒子物質など  
かき集めるように  
庭先をかすめ飛ぶ

冬をやり過ごした  
自転車チューブが  
へたり込んだまま

しがみつくように  
ジャガイモ喰らう  
食卓の二人の無言

「ニーチェの馬」の  
嵐がやんだ静けさが  
通せんぼをして響き

涸れ果てた井戸に  
蒸かせず焼き芋へ  
火種も尽きた闇が

(13.03.01)

## 胡座立ち

この頃の体調が  
日替わり激しい  
気象に乗り遅れ

身体を扱う技の  
斜面の変化への  
対応に遅れたら

ひっくり返って  
下まで落ちずに  
立ち上がり滑る

立ち向かうにも  
逃げるにしても  
座り方で違いが

後ろから襲われ  
回り立ち上がり  
素早く対処する

真っ向の危機に  
胡座から立って  
真っ直ぐ逃げる

(13.03.15)

寒気払い

三月を吹き荒れ  
寒雲を追ひ払う  
家鳴りの居心地

昼夜がようやく  
重なったような  
夜明けの眼差し

びつたり重なる  
スプーンとなり  
温もりを分かち

寝起きに衣替え  
汚れた洗面台を  
井戸水で磨けば

胸の詰まりなど  
無かつたような  
小鳥のさえずり

啄む梅の花枝を  
止り木に飛立つ  
嘴が握りに見え

(13.03.19)

シーソー

日替わり空模様を  
抜けきったような  
朝方の青空の高さ

木の芽時を堪えて  
融雪ホースを丸め  
裏の雪囲いも外し

主役が歳を経ない  
スポ少お別れ会が  
三十回あまりになり

日当たりの軒下で  
そつと手を挙げる  
水仙の開花を数え

中学で続ける子も  
途中下車した子も  
シーソーの真ん中

庭に盛り上がった  
モグラ道を踏んで  
もう一度やり直し

(13.03.22)



三面鏡

庭木の枝の茂み  
嘴が啄んでいる  
無念が花開けば

ピントも合わず  
身体を動かして  
居場所が決まり

手かせ足かせで  
営む家の庭から  
地底と空を隔て

羽搏いてみれば  
かすみ網に絡む  
XYZの三脈編み

同期の三叉路に  
抜け羽根を数え  
距離感が途絶え

引つ繰り返れば  
心身の座が浮く  
三大陸を俯瞰し

(13.03.26)

電話口

残夢を拭取つて  
梅の花が散れば  
温い雨に濡れる

目覚めたような  
動きでこつそり  
遺影を壁に吊り

引つ張り出した  
色紙をひつそり  
飾り立て眺める

なりふかまわず  
手を合わせても  
臨死体験知らず

〈世界〉からの  
人称詐欺を盗み  
聞いている倫理

電話が開通した  
日からネットで  
繋がった世間で  
(13.03.29)

## 開花

ほころびはじめた  
庭の花がそばだつ  
ざわめきの彼方へ

週末の天気崩れで  
滑り損なつたまま  
冬の名残の斜面に

箱庭のような幻の  
花壇から飛立って  
身構えた着地まで

投げ損なつた球に  
指のひつかかりが  
記憶されていたか

花開くこともなく  
ゲームから退いた  
気付きの合わせ技

身体が弛んだまま  
力みがとどかない  
グリップの握りに

(13:04:02)

隠れ臆

濡れた屋根の向う  
春霞をとおり抜け  
燦々と輝くばかり

眠ったままの鳥や  
昆虫を置き去りに  
山麓の残雪が弛み

小川から用水まで  
ヤングアダルトの  
素足が潺々と流れ

十三から十九までを  
なりふり構わずに  
ないがしろにせず

花心を数えるより  
接写するしかない  
何かに八つ当たり

川面を叩いている  
出逢いの鼓動から  
ぶっつけ本番まで

(13:04.05)

## 花見

先週末の春嵐など  
忘れたかのように  
持ちこたえている

母の不在を隠して  
三年目の花が開き  
庭の雑草も生えて

苔生すまでもなく  
夫婦二人になった  
家屋の見取り図に

腰を下ろしたまま  
透かし見る向うを  
閉ざす強風注意報

「ル・アーヴルの  
靴みがき」の中で  
妻が全快退院して

花開く住処に帰り  
密航少年を助けた  
亭主と一緒に眺め

(13.04.09)

霧吹き

肌寒い日が続き  
市内の桜名所や  
土手沿いの向う

丘陵地あたりも  
散り際を揃えた  
みたいな眺めに

いつもとは違い  
庭では八重桜と  
木瓜が咲き揃い

鶯や雉の鳴声も  
まだ聞こえない  
季節の耳元には

背伸びしすぎて  
踏みしだかれた  
水仙が霧を吹き

四枚目の巣網に  
母の祥月命日を  
浮かび上がらせ  
(13.04.12)

光と闇

雉の朝鳴き近く  
夢見の悪さなど  
蛇口へと流され

散り始めた花が  
庭土深く埋もれ  
植物の心を飾り

母の実家が遠く  
なりはじめても  
曲がった腰軽く

風呂敷いっばい  
背負つてきては  
帰った婆さんを

見失いながらも  
追いかけそうな  
天下一品の旗印

怒りや不安から  
枝葉が削がれた  
冥想のひとつき

(13:04.16)

稽古法

緑づく街路樹の  
心がけも知らず  
散歩する動物心

まとわりつかれ  
みはなされつつ  
きがきじゃない

わかりすぎてて  
なにがなんだか  
よくわからない

すぎたことなど  
どうでもよくて  
ただひたすらに

さきのことなど  
いいかげんなら  
いましたいこと

あるはずもなく  
何にもないから  
ためすしかなか

(13.04.19)



## 逃げ虫

出戻つたような  
寒さ続きで庭の  
花持ちが良くて

あぶれたように  
羽音もさせない  
小さな虫が飛び

壁際に止まった  
姿を接写すれば  
脚が足りない姿

捕虫網から逃げ  
筒卵からこぼれ  
少年はいずこへ

バッタを怖がり  
トンボを追って  
少年は浜辺まで

人知れず集めた  
生き物標本など  
幼い日の抜け殻

(13.04.23)

## 佇立

さてどこへ行こう  
新緑に隠れながら  
樹々が腕をのぼす

久しぶり自転車で  
喉が渴き腹も減り  
立ち寄る店を探し

無駄足走行を止め  
自転車ナビに頼る  
手探り足探り履歴

芽生えの始動から  
若木の立ち姿まで  
そよいで見え隠れ

引き抜かれた根が  
枯れてしまわない  
ルートが幹を巡り

収めどころを求め  
ピアノ・トリオの  
絶妙の一拍が過ぎ

(13:04:30)

反転

五月になっても  
冷たい緑が光る  
冬型の気圧配置

東西バランスが  
崩れたみたい  
に振り分けられて

日向と影が描く  
衣替えの地図に  
描き残していた

身動きならない  
ルートが不意に  
繋がったように

繰り返す日常の  
一コマを仕切る  
障子戸を透かし

くぐり抜けきた  
陽射しで描いた  
一筆書きの動き

(13.05.03)

幕間から

鳴き声が響けば  
水辺で絡み合う  
二羽の鳥のよう

幼年の釣り糸で  
山間のため池の  
自画像を釣上げ

持帰りタライに  
浮かべ走らせた  
ポンポン蒸気船

仏壇から失敬し  
短くした蠟燭が  
燃え尽きるまで

周回するうちに  
消えない航跡が  
とぐろを巻いて

砕氷船のように  
油膜を切り刻み  
網目の奥へ消え

(13.05.07)

緑怪談

幹を覆い隠して  
新緑が酌み取る  
井戸水で顔洗う

眠りから覚めた  
エレベーターの  
乗心地に騙され

恥じ入る稽古で  
会心の一撃など  
知らずに繰返し

六階から三階に  
減った階段でも  
疲れを覚えたら

脚を開き上げて  
一段ずつ抜けば  
百段でも半分に

上りはより良く  
下りは怖くなる  
一段抜き行帰り

(13.05.10)

付箋

柔らかく繁った  
陽射しの陰から  
響いた眼差しに

面影を探したら  
かくれんぼする  
観覧車が回って

庭の植え込みで  
時計草の記憶が  
鬼ごっこに興じ

首根っこ辺りで  
仕切られている  
追いかけてここに

着の身着のまま  
樹木を食荒らし  
鳥獣の座標から

異数の界限まで  
身体を駆け巡り  
腑に落ちるまで

(13.05.17)

小養い

食荒らされた  
羊の群れから  
はぐれた山羊

働こうとして  
動けない手に  
指の形が教え

上り下りする  
日常の斜面を  
横切っていく

動きの葉陰に  
抽象と具象が  
交叉するなら

見えない管を  
わかりやすく  
抜けるように

竹馬から下り  
立つことから  
先走らぬよう

(13.05.21)

## 拮抗

筆ろうとして  
真つ直ぐ咲き  
揃った雑草に

引き抜かれた  
手指の指向が  
通り抜けたら

動きの一つが  
知らぬままに  
身体に目覚め

働いだしたら  
思いもよらぬ  
行いとなつて

体内に満ちた  
自然な作用が  
転機の行動へ

先走らないで  
速まるままに  
為そうとせず

(13.05.24)



雪片譜

残雪の山肌から  
脱けだしてきた  
寄書きのひと言

庭の片隅に咲く  
薔薇のひと時が  
一輪挿しに届き

一角獣の鼻先に  
突きつけられた  
はなむけの由来

耳目に晒されて  
違和が残つたら  
跡形もなくなり

呼びかけが訝す  
山裾に辿り着き  
脱ぎ捨てられて

目先が利かずに  
匂いや音だけが  
動きに溶けこむ

(13.05.28)

## 気休め

行き交う階段に  
人氣が少ないと  
試したくなつて

行抜きの散文の  
隙間から登つて  
下りてくるまで

手足の動きなど  
思いもよらない  
見通しの良さに

別れの出会いが  
首を振るように  
待ち受けるから

やり直せなくて  
ゆくえしれずの  
行間でひとまず

切り上げてみて  
休憩を挿み込む  
気付きの踊り場

(13:05:31)

葉隠れ

雨降りが少なく  
夏日も多かった  
五月の庭の異変  
滅多に虫喰いの  
ないアジサイや  
柗がぼろぼろに  
蝶の幼虫なみに  
偏食する昆虫を  
調べ終えてから  
大振りにならず  
バットや木刀や  
ラケットなどを  
素早く動かせる  
指使いで写した  
跡形のない葉脈  
悲しみや怒りが  
透けて見えたら  
御の字の撒布を

(13.06.04)

初舞台

郭公の初鳴きで  
幕が開いた空に  
プリマドンナが

南から北に向う  
硬直した姿勢を  
一直線に消して

音もなく名機が  
あらぬ方角から  
丁寧に整備され

昆虫少年めいた  
植物少年を装う  
中途半端な夏の

縁側から台所へ  
なぜ産んだのか  
埋まらない問い

生の蔓から放つ  
飛ぶ理由がない  
飛行機少年の謎

(13.06.07)

## 海辺の観覧

自転車と電車の  
走りを比較した  
海風の地図から

水槽に閉ざされ  
梅雨も知らない  
魚の側線が囁く

歩き疲れる前に  
ヨメと乗り込む  
観覧車の一巡り

輸送船の航跡に  
紛れた蝶の羽が  
海峡を渡つたら

傾いた無人駅を  
置去り過ぎ行く  
特急電車が響き

高見から眺める  
水平線の彼方に  
消え残る出生が

(13.06.11)

河童本

試合開始前の  
外野席に届く  
打球の擦過音

TVカメラから  
聞えないけど  
確かに見える

誰が言ったか  
恋愛は遠距離  
より近距離で

仲間に読まれ  
届かなかった  
恋文の虚しさ

中学校通いの  
道筋で立寄る  
貸本屋の棚板

お袋の読本を  
借出すうちに  
裏本の扉絵が  
(13.06.14)

捨て鉢

梅雨入りなど  
そ知らぬ顔の  
紫陽花が濡れ

支点が邪魔な  
腰痛姿勢から  
立ち直るまで

霧吹きかける  
鉢植え野菜の  
発芽を探せば

すり潰された  
無意識の種が  
鉢底から抜け

有るも無きも  
過去と未来が  
圧縮されたら

どうでもなく  
ちようどいい  
いまここから

(13.06.18)

キセキ

濡れて落ちる  
梅の実が緑を  
際立たせ響き

不要な力みを  
拭いきれない  
老いの不明に

黄変したのや  
枯れかかった  
庭木が齒痒く

手や腕に頼る  
四足歩行時の  
体幹の足跡が

残された葉の  
虫喰いを探し  
はたき落とす

毛虫の動きで  
地べたに届く  
柔らかな曲線

(13.06.21)



## 延長戦

焼けた手の甲に  
まだ残っている  
九回裏の無得点

S B Oの並びで  
スコアボードに  
ボールカウント

ときおり低空で  
横切る飛行機に  
追われたカラス

外野手の後ろに  
不時着したまま  
スタンドを眺め

古稀を記念した  
グラスに注いで  
飲む酒の味わい

王や長島時代の  
歓声と野次など  
思い出せようか

(13.06.25)

## 帰宅

梅雨の晴れ間の  
交差点の空高く  
糸真珠が羽撃き

運動後の行為を  
巻き戻した音楽  
ビデオに上書き

活字が小さくて  
読めなくなった  
本の背を壁際に

聴かなくなった  
LPレコードまで  
渡した橋の脆さ

バス停で待受け  
ヨメの自転車の  
籠に鞆を預けて

六月の雨量計が  
横断歩道途上を  
遠ざかっていく

(13.06.28)

ヒーロー

クサグモの巣が  
花が散り終えた  
ツツジの茂みに

広げたネットの  
トンネルの奥の  
始まりと終わり

継ぎ目などない  
手入れを怠った  
鉢植えの言伝え

揺らぐ屋台骨で  
耳を傾け聴いた  
葉っぱの震えが

崩れ落ちそうな  
物語の網の目に  
植え込まれたら

怪獣に立ち向う  
忘れられていた  
ウルトラX登場

(13.07.02)

束になつて

鉢植え野菜が  
双葉になつて  
立てないまま

間引きしても  
真夏日続きで  
育ちあぐねて

過不足のない  
力が働くには  
どんな姿勢が

身体を教材に  
手近な道具を  
使いこなせば

手癖足癖など  
身に纏つたら  
気づきにくく

日盛りの庭で  
昆虫の抜殻を  
写し撮る稽古

(13.07.09)

夏草

庭の打ち水が  
悲歌を奏でた  
祖父の臨終に

働くルンバで  
草むしりなど  
もつてのほか

苔生すまでに  
衰えた足腰が  
草抜きを止め

電動草刈機が  
訳の分らない  
余命を取留め

玄関先に座り  
虫の行く末を  
聴き取るお袋

遊び付き合い  
働いて惚れて  
枯れて果てる

(13.07.16)

雲の轍

俄雨が教える  
そろそろ庭に  
水撒く頃合い

砂埃を卷上げ  
遠い田舎道を  
走り抜けたら

手製の弓矢が  
野良猫や犬を  
目がけ放たれ

輪を描く鳶が  
見下ろす川へ  
釣り竿を投げ

吹寄せる風に  
裸体の黒髪が  
川面を乱せば

未知の魚群が  
雲間から現れ  
白昼の星空へ

(13.07.19)

夏の額縁

夏日以下だと  
涼しいなどと  
過ごした夏も

真夏日以下を  
目安にしての  
その日暮らし

汗を流す水を  
汲上げている  
井戸の縁から

真つ逆さまに  
閉じ込められ  
ぶら下がって

仄暗い水鏡に  
嵌め込まれた  
風景を掬えば

釣瓶を結んだ  
身体が撓んで  
一瞬の夏空へ

(13.07.23)

水たまり

バス停で聞いた  
郭公の鳴き声を  
置き忘れたまま

豪雨に逃げ惑う  
濡れ鼠の群れが  
雨脚を食荒らす

托卵のひな鳥が  
雷雨が響き渡る  
教室に取残され

手をこまねいて  
ひび割れた殻に  
閉じこめたのに

響くことのない  
孵化の一瞬から  
冥想の一時まで

いまここにある  
水たまりに映る  
空が乾いて消え

(13.07.26)



人さらい

とつくに廃校の  
同窓会の案内に  
夏座敷の消印が

畳裏でとぐろを  
巻いた青大将の  
舌先に揺らめく

黄色い水着から  
黒い水着へ泳ぎ  
渡る少女の浜辺

林間学校を吹く  
松林の風が運ぶ  
母が綴った文面

未だに泳げない  
私事を埋め隠す  
砂浜の人さらい

昼寝する祖父の  
軒から抜けだし  
川釣りの土手へ

(13:07:30)

紙切れ

八月に入つての  
梅雨明けの空は  
そばえのようで

虫食いだらけの  
紫陽花が逃した  
雨傘の恥じらい

刃物に馴染んだ  
手の込み具合を  
取り戻せなくて

父の忘れ形見の  
刀剣を握つても  
抜き差しならぬ

老境から始まる  
力が抜けきつた  
切っ先のように

巣立ちの時期を  
待受けた小鳥が  
飛立つ空白の空

(13.08.06)

屋上にて

凶鑑カバーを  
壁に貼ったら  
どんな眺めに

屋上に誘われ  
待受けていた  
数々の出来事

殴り合っても  
絡み合っても  
測りきれない

青春交叉点を  
どうにか抜け  
老いの深みへ

山から海まで  
双眼鏡で辿る  
流域の深さに

届くかどうか  
庭木に水撒く  
ホースの長さ

(13.08.13)

盛夏遡行

書誌の森での  
下草刈りから  
伸び広がる枝

ぶら下がって  
一回転すれば  
着地できるか

性愛を営んで  
踏み倒された  
夏草が起きて

数えられない  
事の終わりを  
繰り返し告げ

胎児の頃から  
聴きなれない  
裂目を遡行し

有史以前から  
読みなれない  
肌触りを縦走  
(13.08.20)

## 遠雷縦走

ずぶ濡れになつて  
逃げるように辿る  
稜線が迷路のよう

途切れた地図から  
滑落した記憶まで  
縫い合わせている

雲間から差込んだ  
温もりが柔らかく  
高山植物を揺らす

未踏の坂道に立つ  
道標に抗うように  
ルートを探せるか

待受ける死の谷の  
迂回路がとぐろを  
巻く渦に弾かれて

老いる心身の座で  
目覚める動きから  
気づく働き方まで

(13.08.23)

生い立ち眩み

過ぎて行く夏の  
昨日の疲れなど  
朝の排便と共に

一気飲みなんて  
立ち食いなども  
ごめんこうむる

虚弱児から渡る  
壮年期の橋桁が  
揺さぶられると

読み飲み衰えて  
視力も排尿時の  
勢いも弱まるか

疲れ直しならぬ  
ロボット掃除や  
電動草刈機など

並みの暮らしの  
重量制限からも  
解除されようか

(13.08.27)

知恵の輪

クロスバイクを  
夕暮れの豪雨で  
置いて帰ったら

翌日あまりにも  
気温が下がって  
置き場所を忘れ

一夏の出来事が  
対岸の風景へと  
後退したように

手足の動かしで  
体内に分散した  
景色を拾い集め

どうあがいても  
出来上がらない  
働き方を試せば

歪みや偏りなど  
邪魔でしかない  
絡み具合が弛み

(13:09:03)

眼鏡拭き

戸惑うような  
気温の低下に  
メガネが曇る

剪定しすぎた  
庭木の眺めに  
職人技を数え

亡くしてみても  
ようやく親の  
姿があらわに

覚えられない  
お経のように  
遠ざかる声が

弾丸のように  
言葉に当って  
砕け散ったら

メガネ拭きで  
日々の汚れを  
拭取る時間を

(13:09:06)



折り返し

朝陽を受けて  
閃光のように  
庭を切り裂く

もぬけの殻の  
蜘蛛の巣から  
たどってみる

七年先なんて  
四九年前と同じ  
あやふやだが

すでに赤線も  
大人への襖も  
見果てぬ夢で

向こう側から  
こちら側から  
暮しの鞍部で

老いを眺めて  
出逢う場所が  
確保できれば

(13.09.10)

空っぽ

書誌整理を終えて  
ダメ押しみたいな  
出戻り残暑の週末

飲み食いつないだ  
日々の仕込み方を  
忘れてしまったら

空っぽの内臓から  
空振りするだけで  
言葉にもならない

減量しすぎたまま  
リングに上がった  
ボクサーのパンチ

漱石の『門』から  
歩みだした夫婦の  
像の遥か彼方まで

尋ね倦ねて帰らぬ  
湖面を飛立たない  
水鳥の泡立つ鳴声

(13.09.13)

## 反転

娑婆中の水蒸気を  
搾り取って各地に  
降らせたことなど

そ知らぬ秋空から  
不問にされた影が  
置き去りにされて

分かったと思つた  
途端に分からない  
自分は行方不明で

子供の一日は長く  
心から納得せずに  
遊びに満たされて

老人の一日は短く  
心から納得させる  
理解などほど遠く

あたりまえの事が  
そうでなくなれば  
生き死に繰り返す

(13.09.17)

月に篝火

食後の庭に出れば  
茶色いカマキリが  
中秋の満月を眺め

コーヒーをこぼし  
使い物にならない  
キーボードを叩き

ハードディスクが  
おしゃかになった  
静けさの向うから

川面に碎け散った  
月明かりの土手を  
散歩した夜が匂う

冷酒をなみなみと  
注いだ杯に映った  
親の姿が小さくて

湖面の向うの岸で  
篝火を焚きながら  
夜の土壌へと消え

(13.09.20)

鼻歌

裏へ回って見れば  
夏に食べ合わせた  
麺類のような混線

振返るまでもなく  
筈で掬ったような  
Y字路での出会い

洗いざらしの声が  
掻き消されたまま  
見え隠れする生簀

時には日に何本も  
他人が見た夢から  
旅行記を紡ぎだす

引き籠もったまま  
旅の驚きを綴った  
画面で仕切られて

廃線まで終らない  
ロードムービーの  
サウンドトラック

(13.09.24)

使途不明

肌寒く晴れてきた  
朝空に冷めやらぬ  
楽天球団優勝の響

東北を舞台にして  
ファイナーレ間近な  
あまちゃん<sup>の</sup>朝

揺れる蓑虫の下の  
素焼きの鉢の縁を  
周回する毛虫の謎

見えない糸で繋ぐ  
風と重力の作用が  
織りなす軒下から

書き込みが少ない  
答案が舞い上がる  
誰もいない教室へ

糸口を伝うように  
見た目と五感から  
交流する冥想掘り

(13.09.27)

蜻蛉

カレンダーが変わり  
開け放った窓枠には  
光と風の羽織が揺れ

刈取る手応え少ない  
雑草の絵筆が描いた  
辺りの樹木の奥行き

フェアな姿勢なんて  
無意識の型に嵌って  
歪んだ動きの元締め

鳩尾で風を受けとめ  
五臓六腑が翻訳する  
季を誰かと交わせば

鎖骨から伸びる腕の  
しなやかさで蝋燭を  
仕留めるように消し

身体と歳月が交わす  
日々の動きを躡ける  
立ち居振る舞いへと

(13.10.01)

蜘蛛を逃がす

庭の金木犀が匂わず  
出かければどこから  
ともなく追いかけて

田舎暮らしを間引き  
引越し家族に付添い  
軒端に立ち尽くせば

その後の一家の姿を  
家の屋根や壁越しに  
繰り広げられるまま

虫喰いだらけの葉に  
似せたようにどこか  
粗雑な蜘蛛の巣が的

射抜こうとして絡む  
無関心の原っぱから  
世間との焦点がボケ

春の庭を飾るように  
鳥を呼び寄せていた  
木瓜の花が狂い咲き

(13.10.04)



## 好奇の泡

サイクリングでは  
稲穂前の朝露光る  
初夏を走っただけ

違和感なく走れる  
季節になつてきて  
伴わない走路事情

文武両道方面なら  
全国模試や大会で  
遠くを見渡せよう

家庭や地域の陰が  
教室やら体育館の  
隅っこに陣取つて

偏差値と勝敗から  
ラインが引かれた  
就活前線が泡立つ

根気採用の果てへ  
見るから観るまで  
身体稽古の積重ね

(13.10.08)

## 遊動

番の蜻蛉が庭先で  
生暖かい風を避け  
破れ羽根を休めて

浮遊する光と風が  
網目状に反射する  
空のキャンパスへ

雲上の図書館まで  
くねくねと曲がる  
アプローチが遠く

時が熟する秋には  
見えてくる歪んだ  
影の向うの空地で

門を抜けあちこち  
遊動の挙げ句には  
どんな批評の像が

破れ果てた世代の  
隙間に吹き荒れる  
往路と復路を映す

(13.10.11)

はだか虫

曇り空の飛蚊症か  
どこからともなく  
軒下に揺れる蓑虫

出不精というより  
後先わからぬまま  
ぶらさがり加減な

ロードムービーが  
日に一本観れたら  
何処でも行けそう

飲食営業中に焼け  
出された夫婦から  
紡ぎだされた旅が

あかはだかになり  
仲が良くも悪くも  
結婚詐欺が抛り所

なんだか生々しく  
どこか可笑しくて  
切なかつたりする

(13.10.15)

## 紅葉列車

庇の影を撥ね除け  
百舌の鳴き声鋭く  
朝の窓辺を横切り

山肌を刻むように  
積もる谷筋の雪が  
紅葉に溶け込んで

台風一過の斜面に  
踏み迷ったような  
レールが延び急ぎ

トロツコを押して  
乗合わせた人影が  
まばらになるまで

海辺の観覧車から  
山麓のゴンドラへ  
紅葉列車が橋渡しし

おしぼり特急から  
ダム湖に航跡残す  
遊覧船の窓辺近く  
(13.10.18)

## 指思案

田植えと稲刈りに  
子供も駆り出され  
指や鎌の使い分け

指相撲に疲れたら  
思案投げ首薬指を  
絡ませ引つ張つて

五本指に入れない  
剣道クラブ活動の  
指を縫う蛇の感触

ラケットに鞍替え  
握り忘れた竹刀や  
ドラムスティック

カウンター伝いに  
聴くピアノストの  
出番前のひととき

足もと掬われたら  
足裏から逃げだす  
小指が驚きに震え

(13.10.22)

## 岐路

翳雲がクジラ雲に  
臓器移植してまで  
ロックし続けても

秋に唄う原住民の  
枯葉の下で隠れた  
石ころのような声

バックコーラスで  
唄われた死ぬには  
もってこいの日は

1905年あたりの  
勝ち戦のちまたで  
粉々に崩れはじめ

無駄話を敷き詰め  
車座になって唄う  
遠いアンソロジー

レコードの棚から  
書棚まで途切れた  
歴史の歩数を数え  
(13.10.29)

逆光

秋の彼方に遠のく  
裏山から県境まで  
向う見ずな山歩き

何体あつたろうか  
ヨメについてきた  
狸のコレクション

鼻の欠けた老婆が  
山道で行き交った  
獣を数珠につなぎ

石のような蝦蟇に  
カモシカの静寂が  
呼吸していた山奥

蛇行する流域伝い  
庭先の軒下に届く  
ユスリカの繁殖力

しばしとどまれよ  
小突き回し回され  
虫柱の筆圧のまま

(13.11.01)

破れ障子

鳶が輪を描いて  
濃くなつた秋の  
網の目を縫えば

張り替えのため  
取り外しにくい  
障子が持出され

隙間風が吹抜け  
掴めず触れない  
教育のはじまり

眺め草むしつた  
今はない家族の  
途切れた気配に

いつかどこかで  
雌雄が女と男に  
成るよう触合い

問答が深まれば  
信と不信の間で  
明滅する静けさ

(13.11.05)



余興

一コマ終えたら  
午後の控室まで  
持越された忘物

銀杏並木に並び  
臭い思いをして  
拾わされた午後

緑地帯に踏込み  
銀杏拾う人影が  
車道に長く伸び

通学から通勤へ  
無免許の谷間で  
列車に乗り換え

自転車で余暇を  
走り抜けてきた  
眼鏡の埃を払い

寒さで音出しに  
手間取るような  
老いの鋳型崩し

(13.11.08)

冬構え

冷気の彼方から  
百舌の鳴き声が  
薄氷を呼び寄せ

無人のカットが  
漫画や映画等に  
無言で挿入され

貧乏でつながる  
なんて事が遠い  
画面の彼方から

後戻りできない  
消費つながらで  
コマ割りの外へ

今日の出来事を  
歌詞の解らない  
唄声がひもとく

雪吊りを待つて  
立ち尽す庭木に  
飛来しない水鳥

(13.11.12)

葉草

色づいた紅葉の  
傍らの歩道橋が  
枯葉を掻き集め

踏みしめ響けば  
バンジョーから  
船出した山並み

アフリカの渚に  
映えるピアノが  
奥地へと運ばれ

フルートの音が  
瀑布の展望台に  
散りばめられて

ブッシュマンが  
引抜いた葉草の  
根が埋め戻され

大地に響き渡る  
うねりを聴取る  
ピアノの影

(13.11.15)

料金不足

十一月の恋人から  
樹木の茂みまで  
素早く尾を引き

書き損じたまま  
寒空を飛翔する  
冬紅葉の便箋が

羽撃きとなつて  
宛先不明のまま  
巣箱に仕舞われ

出かける寒さで  
数年ぶりに着た  
内ポケットには

同性愛と多重な  
人格が織りなす  
見返りサーカス

空中ブランコが  
時雨で剥がれた  
切手の下に現れ

(13.11.19)

## 搬送辞退

街路樹の紅葉が  
氷雨に濡れ光る  
艶消しの画面で

ゾンビ漫画読む  
手触りが冷たく  
立ち往生しそう

時間講師作業も  
古稀を目途にし  
抜けだしきれず

やらずもがなの  
赤から紫に移る  
老化の祝いなど

呼吸しそこなう  
ストレスなんて  
見ず知らずなら

人それぞれだが  
臓器の選択性に  
任せるしかない

(13.11.22)

二色紅葉

傾けた傘で  
掬いとった  
水たまり裏

濡れ落葉も  
舞い上がる  
風の吐息が

打ち続いた  
アジアでの  
自然災害に

憲法九条と  
二十一条が  
酸欠状態で

きときとの  
もの言えぬ  
高齢冷や水

不自然でも  
反自然でも  
見た目でも  
(13.11.29)

手遅れ

両者減量に負け  
リングで闘った  
試合のむなしさ

正体不明家族や  
要介護家族から  
お呼びがかかる

なんて事を経た  
今となってから  
工事など不要の

モニター機器や  
人感センサーを  
取付けてみたら

いやな感じが  
二十年近くも前に  
はじまっていた

阪神の大震災や  
地下鉄サリンの  
前年の首相発言  
(13.12.06)

## 居留器

今日の空模様を  
一日の終わりに  
なんと書込めば

灰色をグレイと  
言い換えられる  
文献を抛り所に

ランドサットの  
解析映像を読む  
書物蔵を見つけ

鳥人間みたいな  
DNAの記憶へと  
頁を羽搏かせて

見失った距離を  
測り直すように  
稽古を繰り返す

余白がグレーに  
固まらないよう  
整える呼吸から  
(13.12.17)



## 不自然

木枯らし一号と  
春一番との間の  
冬將軍のように

人間のあり方を  
識別させようと  
成り立つ世界が

見通されている  
ランガナタンの  
図書館の五原則

生き延びるため  
知恵や体力など  
の用い方を学び

生産と消費との  
隔たりを調べる  
情報が制御する

俯瞰視線を経て  
自然過程を逸れ  
労働が食み出し

(13.12.20)

## 粒立ち

作品中のCGが見事になるほど映画が薄っぺら

怪しげな音源の超廉価版CDではJazz名盤が泣く

極上の暇つぶし寒い日の読書や音楽に運動など

フォアハンドは翼を畳むようにバックハンドは

翼を拡げるよう肩甲骨を使って鳥人間を再創造

リクリエイトでフェルメールの時空が更新され  
(13.12.24)

伝聞

歳暮れ距離感を  
かき消すように  
みぞれから雪へ

さほど変わらぬ  
積もるほこりを  
確かめる煤払い

軒下に移動した  
祖父伝来の鉢に  
遠い餅つきの影

「恋」と「革命」の  
幻を臼と杵で搗いて  
囲炉裏で焼いて食べ

満州から戻られた  
村人の世間話など  
盗み聞きしただけ

結露してきた窓を  
拭取ったりしても  
もう何も聞えない

(13.12.27)

年越し

晦日の夜廻りで  
拍子木の鳴りが  
いい打ち合わせ

一年を振り返り  
払い落とす煤に  
紛れ込んだ新年

歳に似合わない  
カレンダーなど  
どこに吊るそう

暖房のなかった  
風呂やトイレの  
暮らしが遠のき

遅れをとり戻し  
立ち居ふるまう  
日頃の身体捌き

追いつけなくて  
気付いた頃には  
すでに通り過ぎ

(13.12.31)

付箋

十字路で立ち話抄二〇一二年九月～二〇一三年十二月

発行 二〇一五年十月二十五日

著者 吉田 恵 吉

編集・発行 〒939-8036 富山市

高屋敷731-6 吉田恵吉